

繪本通俗三國志

五編

九

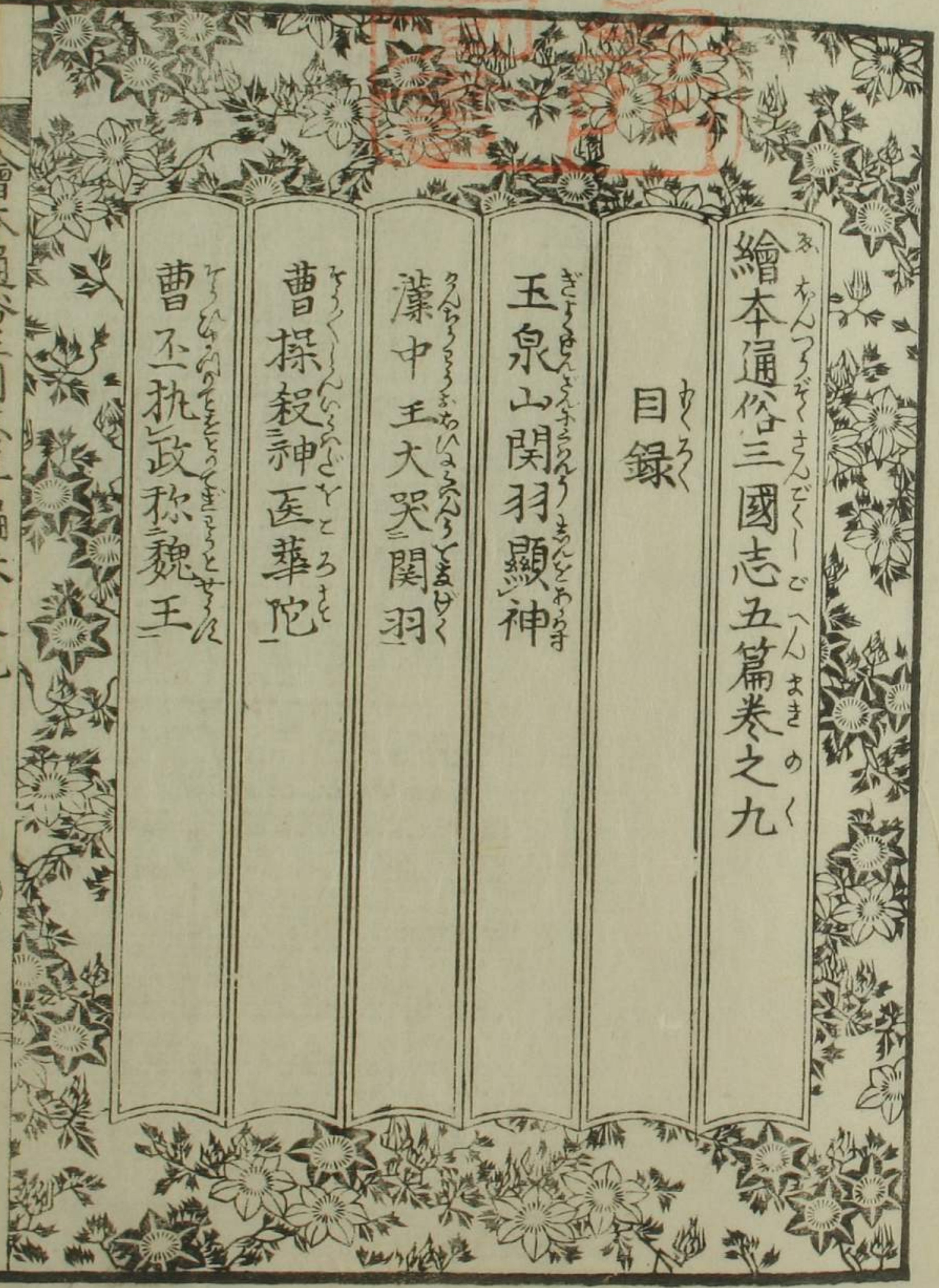
49  
221  
21



水  
221  
49

東  
學  
堂

正  
業



繪本通俗三國志五篇卷之九

目錄

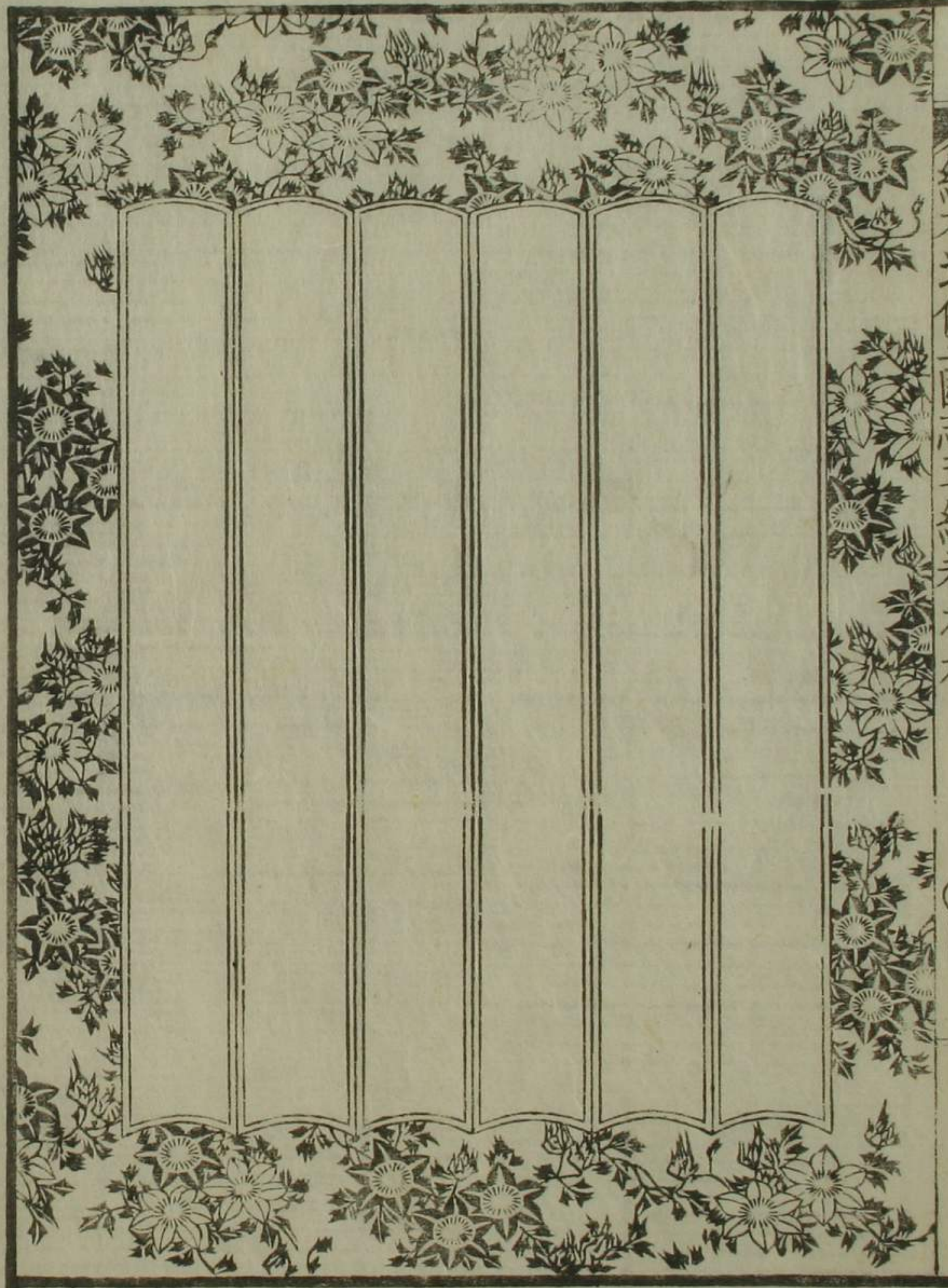
玉泉山関羽顯神

濂中王大哭関羽

曹操殺神医華陀

曹丕執政称魏王

繪本通俗三國志五篇卷之九



新本通俗三國志五編卷之九

関羽王泉山頭神

諸葛瑤城を出て。孫權を見へ関羽は鉄石のごとくなりて。説く  
らむこと。然りけむと孫權が曰く。されまて忠義の人なるを  
るといひいせし呂範とて出でて曰く。某はかくら。その吉凶を  
トへん孫權まらるべしと。同トけむと呂範著を殺け三び  
占ふ。とあるは地水師の卦に當り。さららむ。玄武の臨應あり。  
敵人とぞ走るべしと。やければ孫權喜び。呂蒙も問て曰く。  
敵人遠走るの卦を得たり。汝いふある計とてのりて。擒ませ  
ん。呂蒙笑て曰く。卦の象よく某の意に合へり。関羽たとい  
天を翔る翼ありとも。もが羅を飛べ。しづふて能き。某を

二計を定め置り。麥城の四方をあたるとある路あり。量は関羽の  
勢をればひろき路より走らざれば北の方より細く險き小路の  
ればうらやまき。されしより走らざれば朱然の精兵五千余騎をさ  
ばけ。麥城の北二十里に伏して敵を待ち。共戦ひをまじき。  
後より追討をまじく。敵をうらやまき。戦ふをまじく。な  
る先よと臨沮をさして走らざれば。預也潘璋の精兵五百人  
を付て。臨沮の山路に伏置る。必ず路を詰り。その外路を  
認將を分て。固く守らざれば。北の門はうらやま。弱り疲れたる  
兵を置り。関羽をうらやまき。その門より走らざれば。孫權又呂範を  
命じて。トへいふ。呂範又卦を設けて曰く。その卦敵は  
西北よりうらやまき。走らざれば。今夜の亥の刻。うらやまき。擒めせらるる。

孫權大に喜び。遂に朱然潘璋を二手の勢を付て。い  
はむ。そのとら。麥城に。関羽手下の兵を計り。三百人  
を置り。とら。まじき。兵糧をたぬり。矢種を射尽して。  
守らざれば。おめりけ。如何せん。と。殺さるる。夜に入て。城  
外より。呉の勢。名をよんで。招き。壁をのり。して。出  
多し。関羽計をた窮り。力尽。王甫をむらうて。やける。悔  
し。御辺の諫を。用ひ。今日か。福。および。今い  
て。計を。おさ。王甫涙を。お。今日。急。太公  
望。再び。出ると。計。お。お。趙累。白く。援  
の。きた。ら。お。へ。封。孟達。兵。お。早。ま  
の。城。を。打。棄。蜀。へ。入。り。て。再び。兵。を。整。へ。お。恨。を。お。お。人

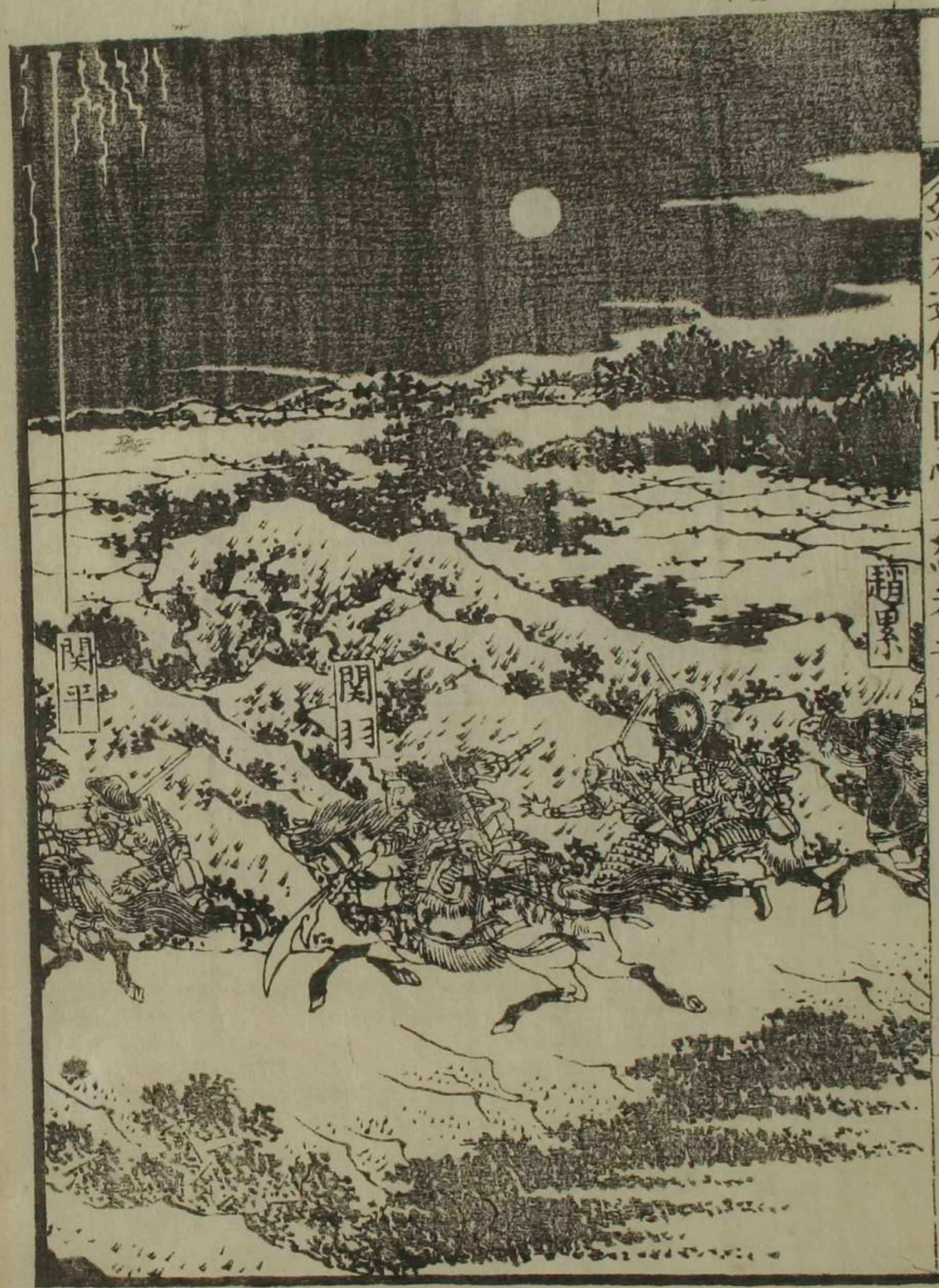
関羽げふもとて。矢倉の上へて望えらる。北ある小路は、  
れ弱りたる勢。旗の色。その色を以て。之を以て。とて。あへち。  
左右を問て曰く。たゞす。小路の方へ何へ通む。一人答  
曰く。路狭く。險阻の多し。蜀の國へ通む。関羽がひ  
く。今夜は。この路より走り去る。王甫諫て曰く。小路  
の敵の伏兵あらん。大路より走り。人関羽が曰く。は  
ち。伏勢ありとも。まゝ。おんぞ。怖る。兵を揃け  
べ。王甫る。哭て曰く。將軍。路を。御身を保  
り。其手下の勢。百余人。命を棄て。この城を守り。微塵  
も。あつとも。敵を降ら。望ら。將軍速に。来て。救ひ  
たり。関羽も。大に。哭て。相別。関平。趙累。と。二百余騎を

従て。北の門より。打て。出。吳の勢。四角八方へ。追散し  
け。と。小路を。開て。通し。関羽。真先。刀を。提げ。く。  
初更の。たる。す。三十里あり。来る。山際より。鼓の  
を。火の。光天を。焦し。吳の大將。朱然。五千余騎。て。  
討て。出。関羽。何く。へ。逃る。早く。降と。と。り。け。関羽  
刀。ま。戦へ。と。朱然。怖。走。関羽。ひ  
あ。の。追。忽。然。と。鼓の。声。ひ。四。方  
の。伏。勢。と。起。関羽。戦。ひ。を。臨。沮。の。小。路。を  
ひ。走。り。け。朱。然。後。より。攻。蕙。り。け。傷。を。被。り  
た。死。の。五。六。十。人。関羽。馬。を。飛。し。五。六。里。を。わ。り  
走。り。け。又。一。手。の。勢。討。て。出。吳。の大。將。潘。璋。四。方。より

關羽  
利を失  
子夜  
臨  
走  
る



關平



續世通俗三國志五卷之九

趙累

關羽

關平



其二



火をとりけて。真先を馬と出さ。関羽眼を怒り刀をまかりて。蒐りけまへ。潘璋戦ひ。三合あらざぬ馬を回して。逃走。関羽と追て進む。又四方の伏勢が一度も起りけ。関羽馬を飛して。山路を走る。関平路よりきこ。趙累すむ。乱軍の中。討つこと。告ぐれば。関羽おげ。き哀み。関平と。後陣と。自ら先を。路を。関平。兵十余人あり。已に進んで。決石の山路を。通。み。苦。段。げりて。樹木枝を。時を。五更の。起。て。長き鎌を。の。熊手。かけて。関羽。馬。倒。ひ。き。落。し。潘璋が。手下。馬。忠。と。入。る。大將。むら。がり。蒐。り。て。

卒に繩をうけたりける。関平。お。ま。ま。付。當。の。敵。を。打。ま。て。き。ろ。み。來。り。救。い。ん。と。を。後。より。朱。然。潘。璋。大。勢。み。て。取。囲。む。関。平。な。ご。一。人。お。ま。ま。力。尽。て。父。子。と。も。生。取。れ。けり。吳。主。孫。權。ま。の。由。を。ま。ま。自。ら。謀。將。を。引。て。來。り。け。る。と。き。夜。も。ち。の。ぐ。と。明。て。馬。忠。を。れ。ち。関。羽。を。引。て。生。來。り。孫。權。を。け。る。へ。ま。ま。之。を。一。く。將。軍。の。德。を。慕。て。一。家。の。好。む。む。と。べ。ん。と。ち。の。も。何。故。を。徒。ひ。ろ。さ。る。將。軍。常。に。天。下。に。敵。あ。し。と。お。ひ。ひ。の。ひ。が。今。日。あ。ま。と。て。ま。ま。生。挺。れ。の。入。る。今。日。より。し。て。乃。ち。ち。の。ま。ま。降。ら。ん。や。関。羽。色。を。あ。げ。て。罰。り。碧。眼。の。小。兒。紫。髯。の。鼠。輩。を。よく。一。言。を。ま。ま。け。る。ま。劉。皇。叔。と。義。を。む。と。ん。で。天。下。の。逆。賊。を。除。ん。と。ま。る。



ある。今日あやまひて。奸計の中より。死して。敵を滅  
 さんとあつても。あつた。汝は降らんや。とひけし。孫権左  
 右をとりて。曰く。関羽は。世の英雄。と深く。たつて。を  
 惜む。今礼をあつて。宥さんとあつても。如何。主  
 簿左成が曰く。元用い。むか。曹操の。人を得て。三日  
 小宴五日大宴。馬の。とれた。金と。馬より。下る時  
 へ。銀と。めと。壽亭侯の。爵と。封と。て。美女十人を。たふし。い  
 うども。卒に。住まらむ。その。ち。五関。大將と。切たると。たふ  
 曹操の。おと。惜んで。殺す。と。得む。却て。今。その。禍と。受  
 都と。迂して。鋒と。避んと。あつても。況や。君の。深き。仇と。あつて。狼の  
 子。の。艱と。あつても。後と。あつても。大。ある。害と。あつて。孫権。首と。

たれて。汝が。言志。あり。推せ。といひ。けし。と。武士。関羽。を。ひき  
 出して。関平。と。共。首と。切ると。たふ。建安二十四年。十月中旬  
 あり。孫権。と。あつち。関羽。が。乗。馬。へ。赤兔。と。て。天下。の。駿  
 足。と。あつて。卒。馬。忠。た。ま。ひ。青龍。の。偃。月。刀。を。潘璋。と。た。ま  
 ひ。ける。が。その。馬。の。日。より。草料。を。食む。枚。日。あり。て。死。け  
 る。ところ。を。不思議。な。れ。交。城。と。王。甫。と。へ。骨。顛。き。肉。を。ど  
 ろ。き。し。と。周。倉。と。相。議。し。昨夜。の。夢。に。関。将。軍。全。身。血。を。け  
 ぐ。と。て。某。が。前。に。立。り。え。り。ま。う。と。問。と。と。た。忽。然。と。て  
 か。ど。ろ。き。覚。たり。如何。あり。と。い。ふ。と。た。と。い。ふ。呉。の。勢。関  
 羽。父子。の。首。を。ゆ。り。て。早く。城。を。ひ。ら。け。と。呼。ぶ。と。告。げ。れ。ば。王  
 甫。と。あ。ど。ろ。き。周。倉。と。矢。倉。と。上。の。て。と。を。り。と。ひ。と。

卒又天倉より落ちて死けし。周倉もみづから首をた  
け。卒小麥城も号不属せり。そのころ不思議ありし。荆  
の當陽縣といふ。王泉山といふ。一山の山あり。山の  
上。普静といふ。禅僧一人。草の庵をむすび居たり。その  
元。元。元。水。関。鎮。関。寺。の。長老。関。羽。と。曰。き。友。あり。しが。天。下  
を。雲。遊。して。その。山。の。関。ある。を。愛。して。毎。日。坐。禅。泰。道。を。  
あ。る。夜。月。白。く。風。清。き。あ。る。ふ。ふ。ふ。ふ。と。女。想。心。を。拂。て。寂。く  
として。坐。した。り。ふ。忽。ち。空。中。に。人。声。あり。く。還。我。頭。来  
と。よ。づ。る。普。静。お。ど。ひ。で。お。ど。し。て。と。れ。ば。関。羽。赤。兎。馬。を。乘  
て。青。竜。刀。を。ひ。ひ。さ。げ。左。に。関。平。右。に。周。倉。と。あ。雲。中。に。ぞ  
立。たり。ける。普。静。と。あ。ま。ち。手。を。持。と。る。拂。子。を。て。菴。の。戸

を打雲長安在といひまられば。関羽が魂魄。頭。又。首。を。悟。雲  
を。た。あ。り。て。馬。より。下。又。手。して。庵。の。前。に。立。て。曰。く。が。師。へ  
あ。る。人。ぞ。孫。が。へ。ら。清。号。を。き。く。普。静。答。て。曰。く。昔。に。水  
関。の。鎮。関。寺。に。對。面。せ。し。が。今。日。あ。る。と。て。普。静。を。ま。り。さ  
る。関。羽。が。曰。く。某。愚。者。なり。と。の。人。ども。精。く。高。教。を。き。く。普  
静。答。て。曰。く。昔。非。今。是。一。切。論。を。り。と。を。休。た。ら。し。將。軍。の  
行。み。る。を。の。り。て。云。ふ。昔。に。白。馬。の。戦。ひ。に。顔。良。は。ま。し。鋒。を  
ま。と。へ。ざ。る。ふ。勿。心。然。と。して。殺。し。え。り。その。人。九。泉。の。下。に。あ。ひ  
て。安。ん。ど。眼。を。ひ。ら。き。ら。ん。や。今。日。呂。蒙。の。計。を。し。て。計。を  
の。り。て。將。軍。を。害。さ。し。と。し。て。計。較。ぶ。べ。し。將。軍。あ。ん  
ど。ん。と。ま。ど。へ。し。し。と。い。ふ。ぞ。あ。ま。り。て。関。羽。菴。の中。に。入。り。普。静

て拜して師とす。後、往く来けり。郷人の徳を感して、山の頂に廟を建て、四時を祭る。祭を致すと、呉主孫権へ、関羽父子を誅して、後酒宴を設けて、諸の將士を酌む。呂蒙は、まこと来らざりけり。今、荆及び得ん。呂蒙が計ありとて、人を遣はし、まほきし。呂蒙をち出來る孫権及び、今、まこと得ん。足きり。ひとまほし。汝が功あり。呂蒙が曰く、一の君の洪福、二の君の武勇、よき。其を、んぞ、いふ足ん。孫権をち、呂蒙の上座をゆがりけり。固辭して、その次座を。孫権をあげて曰く、昔、周瑜功烈世を蓋ひ、膽量人なき。て、卒に曹操を、赤壁を破り、荆

及び取んと計し、不幸ありて、早く死たり。魯肅を、ち、後、曹操、東に下ると、魯肅、周瑜、計を、殺して、破る。これ、二の快きあり。今、呂蒙、計を、定めて、立、及び取。周瑜、魯肅、も、勝る。とて、盃を、あ、之、け、呂蒙、盃を、と、り、て、飲、んと、し、ける。が、俄、に、盃、を、地、に、投、棄、す。孫、権、が、胸、を、掴、んで、大、音、を、出、す。碧、眼、の、小、兒、紫、髯、の、鬚、を、へ、り、て、罵、り、け、り。諸、人、を、ち、り、ひ、て、立、さ、わ、ぐ。ち、呂、蒙、卒、に、孫、権、を、ち、の、け、大、に、歩、んで、上、座、を、と、り、及、び、眼、を、怒、ら、し、眉、を、ち、り、す。黃、巾、の、賊、を、破、り、て、天、下、を、縦、横、と、る。と、三、十、年、一、旦、汝、が、計、を、落、さ、る。と、

關羽の神靈の  
泉山五の  
顯と普の  
静と法の  
託す



會天通全三國志五續卷之九



繪本通全三國志五續卷之九

九

生て汝が肉を啖てとあつて死して必ち呂賊を竟て追ふ我  
はてをもち漢の壽亭侯関羽なりとよびりけし孫権は  
れおどろた詔將と共に地を拜せしは呂蒙へ七夜より  
血をこせりて立るる死にせしむる人をも身毛よだち  
怖れぬり孫権をぬち棺擲せしむる呂蒙が屍をぬ  
墓り南郡の太守馮陵侯の爵を贈りその子呂霸を憐れ  
んで父の職を襲しむ呂蒙死する年四十二歳とた建安  
二十四年十二月七日なり

漢中王大哭関羽

昭やけるへ今君とて関羽を殺ししむぬるべし國の禍は  
久しかりきりて来るべし昔関羽張飛苑園にて玄德と誓  
てまゝ同日に生るとおのむる必ち同日に死すと約せり  
今玄德とて西川の大军を領してと孔明が智張飛  
黄忠馬超趙雲が勇ありとて関羽父子が殺されたるを  
ばらばらと傾國の兵を起し勢ひのつて攻来らるる玄  
徳の命をとりて仇を報せむと國を拒して拒とを得孫  
権をよとまいて怖れおどろかす色を失ひてやけるへとて  
計を忘れり如何してこの禍を免まへ張昭が曰く少  
も御心で苦ぢりし某一の計とあり玄德が攻来らる  
るのみならず國を拒して盤石よりも安らるる孫

權曰。孫がはるる。張昭曰く。曹操は百万の勢を領  
し。都の中。虎威をたかまふ。久しく。漢上の地を取ん  
て。ちのち。玄德あり。きこう。関羽が仇を報せん。ゆゑ。あつて  
う。ちのち。曹操の地を割て。好む。と。曹操。その利をむ  
さ。お。蜀と和睦せ。共。兵を起し。あ。が。國累  
卵。なり。危。なる。志。か。だ。ま。の。使。せ。の。関羽が首を曹  
操。送り。分明。関羽が討たる。本。を。曹操が。所。為  
あり。と。ま。ら。し。ゆ。の。玄。徳。深。く。曹操。を。恨。んで。兵。を。引。く  
魏。を。攻。べ。魏。蜀。と。の。戦。を。た。味。方。の。虚。を。伺。中。の  
計。を。行。へ。ま。る。と。蜀。の。國。を。攻。取。て。次。に。曹操。を  
拒。ぐ。べ。孫。權。大。に。よろ。こ。び。の。計。と。ま。あ。い。ど。妙。なり。と。て

即時。使。を。も。て。曹操。が。方。へ。送。り。け。る。ま。の。と。は。曹操  
の。と。で。洛。陽。を。回。り。け。る。が。吳。の。國。より。使。あり。関羽が首  
を。送。る。と。告。げ。ま。る。喜。んで。曰。く。関羽。を。で。ま  
す。と。ま。ら。し。ゆ。の。玄。徳。の。憂。を。あ。ら。し。め。た。一。人。を。も。て。出。て。曰  
く。ま。ら。し。ゆ。の。吳。の。國。より。禱。を。移。す。の。計。と。諸。人。お。ど。ろ  
ひ。て。ま。ら。し。ゆ。の。司。馬。懿。字。は。仲。達。なり。曹操。を  
の。故。を。問。は。司。馬。懿。が。曰。く。昔。に。玄。徳。関羽。張。飛。三。人。挑  
花。の。園。を。て。義。を。む。ま。ぶ。生。死。を。同。し。せ。ん。と。誓。ひ。たり。今。吳  
の。孫。權。を。て。関羽。を。殺。し。て。玄。徳。が。その。仇。を。報。ぜん。と。を  
怕。れ。首。を。の。り。て。吳。に。送。る。ま。ら。し。ゆ。の。玄。徳。は。関羽。が。討。れ  
る。本。吳。の。國。の。所。為。を。あ。ら。し。め。と。ま。ら。し。ゆ。の。兵。を。起。して

魏を攻させ中よて計を行ひその虚のゆいであつて蜀を  
 取あひの都を取んと計しそのあつたのゆい禱を魏より  
 との計とあつたとき春秋も老龜も不爛移禍於枯  
 桑とのゆい今日まさまふと類せり曹操大まどろひて曰  
 く仲達が言まふと當れりまといふは是を免れん司  
 馬懿が曰くまのゆいまひて易し主上の沈香をゆいで関  
 羽が躬を造り大臣の礼をゆいで厚く葬りひろくまのゆ  
 て世に沙汰せむ玄德深く孫権を恨み吳と蜀と兵を交  
 て戦ふとれ却てその虚のゆいでまを襲ふ力を勞せし  
 て二國を亡さし曹操んよろまび仲達が意見まふと神  
 算ありとて遂に吳の使をよんで對面し匣を開て関羽が首

とつた面平曰のどくちろくまのゆい久々將軍の心を  
 いひけるも髪も鬚もまどろく動て神威あは生るがどく  
 ちろくけむ曹操をどろひて地に倒る諸人まろる扶け起しや  
 久々人人心地ゆいを右にむらて関將軍の眞の天神  
 といひまれば吳の使又関羽が神靈をあらわし呂蒙とちり  
 殺せらるゆい曹操いよく怖と性と殺けて祭をまじ  
 沈香の木を刺で躬と王侯の礼をゆいで洛陽の南門よ  
 り外に葬り大小の百官とくくまを送り曹操がゆい  
 祀をまじく荆王の位を贈りそのち吳の使を回けるまのゆ  
 漢中王東川より成都より軍民を安んどりひけむ  
 孔明奏して曰く主上の夫人世と去りひて孫権が妹孫

夫人へをもて呉の國を回し人倫の道廢せしむ。かちら  
 王紀をむえてその内を正し。劉焉が嫡子劉瑁を妻  
 へ呉氏の女を娶ひて。寡を守りて家あり。夫と賢み。顔  
 色又世に起り乃ち呉懿が妹あり。昔一人の相者の  
 り。夫の女のち必を貴らんと。國中の人士とくく  
 その賢あると志願。後宮に納りて王妃とせん。漢中王の  
 曰く。劉瑁へ。同宗あり。理を不可あらん。法正が  
 曰く。親疎を論じ。晋の文公の子圉に於るごと  
 し。漢中王卒。呉氏をむえて王妃とし。後  
 二人の男子を生じ。兄を劉永字公壽。弟を劉理字奉孝  
 とぞ。ける。東西西川の地民安く。國富んで。不徳化に懐

ける。も。荆より人きたり。吳主孫權。志あり。好を結ん  
 一家の親をまきんと。閔羽怒りて。またがごと  
 詔りけ。孔明やける。然ると。荆に危し。人を遣  
 して。閔羽と代へん。又荆より。早馬きたり。大  
 魏の勢を破りぬと告げ。んと安んじて。喜ぶ。又  
 閔羽が次男閔眞相續て。魏の七軍を滅して。  
 于禁を生捉。龐徳を殺したり。と告げ。魏の勢を打破り。威  
 風遠近に振て。都の内を震動す。方一呉の國より。後を  
 寵をんと。怖。烽火臺を構て。用心を告げ。後  
 漢中王の内を喜び。諸人を退し。後ひ。臥房



ありて睡のひけるが何とやらん志たりと遍身肉顫て  
 んの中安らうらざりて起て燭を点し書け閑ま  
 えり神思昏沈しけれ凡ふ伏て居りふふ勿然と  
 て一陣の風吹来り傍ある燈火滅んとし復明ありけ  
 る首をもたげてえりふ雜とあらむ一人燈火の下に立  
 居り漢中王ふあやも汝のあやのぞ夜中ふこの内へま  
 たまると問う人どもその人さら言ふ漢中王ふ疑  
 りびり起てえりふ閑羽燈火の陰ありて隠さけん  
 と漢中王問て曰くふ弟別てのち恙あやなる夜にこ  
 更てあま来る必むののいあらんは汝と義骨肉の  
 ごとあまえ隠とんとする閑羽泣て曰く願くは兄早く

兵を起して弟の恨をささぎの漢中王又問んとし金  
 冷風さりと吹来りて閑羽行方あらむを失しけりといふ鼓  
 の色きさえて夢打おどるまをふの内大のあやもいそぎ  
 前殿に生て孔明をまびよせ圓と問りふ孔明が曰くされ  
 主上はは閑羽をおひりふ人ふますて夢をあはさる  
 ぞ疑ふとあらんとて相別て退出し已中門の外へ出  
 けと太傅許靖のと生来り孔明ふむらて曰く某いま  
 軍師の府中ふゆて一大事を告んとするふ已宮中へ生ゆ  
 とやて早く去のふ人をせ来り孔明が曰くいま大事のあや  
 許靖が曰く何ともあらむ呉の大將呂蒙已荆及びあそ  
 ひ取て閑羽破きたりて孔明が曰く去とあらん我夜

天文を考ふる。將星を以て。荆楚の地。其落。ころ。あり。わ。ち。巴  
羽が禍。ある。こと。と。志。る。た。主。上。の。哭。き。の。い。ふ。こと。と。悔。れ  
て。い。ま。ど。あ。て。た。の。ゆ。を。告。げ。て。昨。夜。夢。を。見。り。し。も。真。ま。れ  
に。應。じ。た。り。と。た。は。傍。ら。る。屏。風。の。後。より。漢。中。王。走。り。坐。り。し。  
孔明。が。袖。を。引。て。関。羽。を。以。て。禍。ひ。あ。る。軍。師。と。い。ふ。こと。を  
あ。げ。し。き。の。と。宣。へ。ば。孔。明。許。靖。を。と。り。ひ。て。曰。く。さ。た。より。し。と  
し。の。あ。実。あ。き。虚。言。あり。主。上。と。い。ふ。御。心。を。費。し。る。は。不。漢  
中。王。の。曰。く。ま。は。関。羽。と。誓。ひ。て。生。死。を。同。し。と。い。ふ。死。せ。ば  
ま。の。あ。く。独。生。残。ら。し。や。と。た。は。近。臣。奏。し。て。曰。く。馬。良。伊。籍。を  
た。ま。り。漢。中。王。ま。り。し。や。し。よ。せ。問。ひ。人。を。乃。ち。関。羽。が。表。を。出。し。  
い。ま。ど。披。き。の。い。は。ご。あ。る。又。近。臣。奏。し。て。荆。楚。の。廖。化。來。れ

り。と。し。漢。中。王。い。て。ぞ。對。面。し。る。を。廖。化。哭。て。曰。く。呂。蒙  
巴。の。荆。刃。を。お。そ。ひ。取。兵。を。進。て。前。後。より。攻。る。の。は。関。羽  
志。た。り。の。敗。れ。を。僅。に。の。ま。り。し。る。勢。を。引。て。麥。城。へ。い。げ。籠。る  
外。の。援。の。勢。あ。る。敵。大。勢。を。取。巻。た。し。べ。い。定。めて  
敗。れ。の。い。ふ。漢。中。王。又。ま。り。し。若。志。る。を。と。り。し。弟  
ち。ろ。む。を。い。ふ。如。何。と。い。ふ。と。宣。へ。ば。孔。明。が。曰。く。劉。封。孟。達  
い。ま。上。庸。に。あ。り。し。が。ら。援。を。と。り。し。も。あ。て。て。動。さ。し。の。罪。誅  
を。容。し。が。し。主。上。御。心。を。安。ん。ど。し。臣。み。が。ら。一。隊。の。軍  
馬。を。引。い。行。て。関。羽。を。急。に。救。ふ。漢。中。王。涙。を。あ。ら。じ。彼  
は。亡。び。ぬ。と。い。ふ。孤。明。日。に。い。ふ。が。ら。行。て。救  
べ。し。と。い。ふ。兵。を。あ。ら。し。又。関。中。へ。早。馬。を。打。て。張。飛。に



繪本通俗三國志五編卷之九

〇十六

大の由て告りし。その夜いまだ明ざる。追て早馬きたり。関羽夜臨沮み走りて。呉の大將潘璋が内馬忠とのみ。その手み生取。卒に節を屈せしめて。父子とのみ斬れり。と告げし。漢中王大に呼んで。地み昏絶し。文武扶て。後宮入らり。けし。半時をわりして。魁み孔明が曰。主上まらむ。憂ひのし。ところれ。死生有命。富貴在天。関羽よのつ子。割みして。自ら終り。今日まの禍を引出せり。主上よく万金の御身を保て。まのし。と仇を報ド。人漢中王の曰く。是。関羽張飛と。本。園。又。義。を。む。を。び。り。と。た。ち。り。めて。生死。を。同。せ。ん。と。約。せ。り。今。関。羽。を。や。む。七。ぶ。り。と。あ。み。独。生。て。富。貴。を。享。ん。を。り。の。恨。を。雪。ご。と。ん。び。性。日。の。誓。言。を。負。へ。と。

て。又地上み昏絶し。三日のあひで。飲食をたまはず。た。痛。突。て。涙。を。流。し。ま。は。り。ち。ん。べ。孔。明。再。三。諫。て。曰。く。関。羽。不。幸。よ。り。て。ま。ご。く。没。も。主。上。旧。日。の。誓。言。を。お。め。ひ。の。言。く。仇。を。報。ド。人。ま。も。人。の。痛。く。憂。ひ。苦。い。で。御。身。を。ま。ま。ひ。め。る。や。漢。中。王。の。曰。く。ま。は。と。呉。と。誓。言。て。日。月。を。同。せ。ド。孔。明。が。曰。く。呉。の。孫。權。主。上。の。兵。を。起。し。て。仇。を。報。ド。の。い。ふ。と。や。怕。し。関。羽。が。首。を。曹。操。に。送。る。曹。操。乃。ち。王。侯。の。礼。を。の。め。て。あ。の。く。墓。り。た。り。と。沙。汰。し。の。漢。中。王。の。曰。く。ま。は。あ。の。の。意。ど。孔。明。が。曰。く。ま。は。れ。の。呉。より。禍。を。魏。に。移。さ。る。計。を。魏。に。人。物。多。し。人。を。ま。で。ま。の。計。を。と。悟。り。曹。操。を。勸。で。厚。墓。り。主。上。を。り。て。呉。を。討。し。め。ん。と。ま。漢。中。王。の。曰。く。ま。は。

今兵を起して罪を呉に問ふ弟の仇を報を乞へ孔明が曰く  
 今呉の味方をして魏を討つべしと魏の味方をして魏を討つべし  
 とをたれとおふふ深き計とありて虚の計と取んと計し  
 呉の主上と兵を収て動きの便を関羽が為す喪を  
 發して呉と魏と不和あるを伺ひ時を以て討つべしと  
 大の功をなさし百官も一同に諫めけし漢中王  
 を大に許容し其國中大小の將士をたたく孝を  
 けて喪を發し漢中王の南門を祭を設て日夜  
 涙を流して哭きし人

曹操殺神医華陀

曹操は洛陽にありて関羽を葬りし後毎夜泣むらんとし  
 れへ関羽の前のとあまきあらわさける人の中を  
 きまされ文武の大將をあつめて如何せんを議する  
 人をおしける洛陽の行宮殿宇を古て怪異の  
 多し別な新宮を造て迂りて曹操が曰く我々  
 一の殿を造て建始殿と名付んとし其を恨らく  
 良工を賈翊が曰く洛陽に良工を獲越とて其の  
 名を過たるものあらじ曹操の乞ぎめしを以て  
 顧らるるを獲越九間の大殿を画て見せしむ  
 曹操は其を乞ぎて中ける汝が図を以て其を合へり  
 恐らく棟とす材木をまきしを獲越が曰く其を三

十里去て一川の潭あり。躍龍潭と云ふ。前二川の祠あり。そのやうに梨の木あり。高さ十丈あり。たゞその棟梁とせん。曹操大よるまじい卒二人夫を遣して彼梨の木を斫しむる。鋸も鉞もあて透さずとやけまじい。曹操の卒の目もみくら板百騎を領して。たゞち躍龍の祠の馬より下て。たゞとるる。その木亭として。華蓋のどく。雲霧を侵して。たゞも曲ざりけり。びそぎを斫とるる。里の老人を家諫てやける。木の根百年まよふ。神の住りたる老たる神龍此潭まかくれて。人まどぐく是を礼敬さ。大王は。斫む。平生らまて禍をたるとあらん。曹操怒りてやける。平生

普天の下で遊歴する。四十余年。上天子より下。庶人はおよぶ。怖とむとりのあやう。たゞちの邪神まれば。人て。まじい逆ぞ。聖人へ怪力乱神を。詔むとこそまじい。量るよまの木を斫とりとも。あんの疑うあらんとて。佩たふ。劍を抜て。みくら斫けまじい。鋒然として。色をう。血をどまじい。曹操衣を満たまじい。あや怖まむ。再び斫んとまじい。血濺で曹操面を満。左右近侍のまじい。く血を染けまじい。たゞとるま。劍をまじい。馬を乗い。まじい。中へ逃回しける。その夜二更の比。曹操睡るとあま。鎧中まじい。居たりけまじい。忽然として。風吹きたり。一人髪をまじい。劍をまじい。皂き衣を被て。曹操が前まじい。曹操まじい

ひて。まよやのちるまよ。此よ来まると問ふ。その人答て曰く。もよは乃ち  
 梨の木の神あり。汝建始殿と立る意ハ漢の天下と奪んとせ  
 あり。あまのま来りて。まが神木を斫んとせ。まよは已に汝が命  
 數の尽たるをまり。まよまたたひて汝を殺せ。曹操大音邑を  
 あげて。よれや者どもと。まよづりけよ。彼人劍を抜て曹操  
 せとこと斫る曹操大よさけひけるが勿心然として。おどろまきさ  
 ち傍てこれども人もなく。頭腦志たり。又疼んで甚志のびが  
 たりけよ。まよ急ぎ四方に相解名医と求て治せしむる。百  
 計されども驗あり。とれま華歆告て曰く。主上華陀と云名  
 医せまり。まよる。曹操が曰く。昔吳の周泰を療治せるをのう  
 答て曰く。尊命のぼ。曹操が曰く。その名をまよとり。まよ

その才を志らむ。華歆が曰く。華陀字ハ元化沛國譙郡の  
 人。ちる丸そ病を治せる。手ま志とがひて。愈むとりのよとあ  
 く。り。五臟六腑の疾を患るものありて。藥の効あまらるの  
 へとあち。麻肺湯と飲しむる。須臾の内。酒を酔たる。お  
 とく。又死せるがぼ。即ち刀をひて。その腹を剖ひらき。藥湯  
 せひて。臟腑を洗ふ。その人をまよも痛とを覺て。即ち  
 藥線せひて。その口を縫ふ。二十日余を経て。平復せ。その  
 神効此のぼ。甘陵の相夫人とせ。まよをみ。六ヶ月のひこり  
 腹の痛とせ。たりのける。華陀脈を視て曰く。脈の中。まよ  
 男子の胎あり。まよとせ。死せると已に久しとて。即ち藥を  
 あたけよ。果して男胎下り。十日余を経て。全く痊愈ある日

華陀道の上。一人呻吟の音をふきとて。さきへ飲食  
 不下の病ありとて。さきを問。果してまらり。すまふ。蒜乃  
 汁三升を取て。飲し。けむ。甚あ。牛も蛇をめて。華陀が  
 て。長二三尺の蛇を吐け。甚あ。牛も蛇をめて。華陀が  
 家。至。二人の童子。相引。て見し。む。その人。傍。て。ん。を  
 ち。の。蛇。を。壁。の上。に。う。け。と。り。又。廣。陵。の。太。守。陳。登。心。中  
 つ。糸。二。煩。懣。し。面。赤。く。し。て。飲。食。と。る。と。克。を。華。陀。が。曰。く。  
 胸。中。に。投。升。の。虫。あり。内。疔。を。あ。さ。ん。と。び。の。腥。を。食  
 て。起。と。る。疾。あり。と。て。乃。ち。藥。を。あ。え。け。む。果。し。て。虫。を  
 吐。と。三。升。余。り。と。あ。頭。赤。し。て。動。搖。を。華。陀。が。曰。く。さ。き  
 へ。魚。の。毒。あり。發。ま。り。今。日。治。を。と。ん。ど。も。三。年。の。後。ま。と。發。

して。さ。さ。ず。死。せ。ん。と。い。は。ら。陳。登。果。し。て。三。年。の。後。死  
 したり。又。あ。る。人。眉。の。間。に。瘤。あり。て。痒。と。志。の。び。じ。華。陀。が  
 曰。く。さ。の。内。に。飛。物。あり。ま。く。人。に。あ。信。ぜ。を。突。ひ。け。む。華。陀  
 刀。を。め。て。さ。き。を。割。り。一。の。黄。雀。瘤。の中。より。出。て。飛。去。り。  
 又。一。人。犬。足。の。指。を。咬。れ。痒。し。て。甚。と。痛。け。む。華。陀。が  
 曰。く。痛。む。もの。内。に。針。十。箇。あり。痒。の。黒。白。の。基。子。二  
 箇。あり。人。に。あ。さ。き。を。ま。て。犬。に。疑。入。華。陀。刀。を。め。て。さ。き  
 関。果。し。て。ま。り。此。の。ど。き。神。効。を。あ。ら。た。乃。ち。扁  
 鵲。が。如。き。神。医。あり。今。金。城。に。居。住。す。主。上。を。招。ま。し。ま。さ  
 る。曹。操。即。時。使。を。ま。せ。て。華。陀。を。招。ま。し。對。面。し。て。脉。を。診  
 せ。し。む。る。華。陀。が。曰。く。さ。き。へ。主。上。風。息。の。病。あり。曹。操。が。曰。



く。常ニ偏頭風を患ひ不時に発て。やもされ。五七日  
飲食をると能く。汝いふ。く。治せ。華陀曰。去  
の病根。へ。脳袋の中。み。り。て。風。延。出。る。と。克。む。枉。て。藥。を。服  
せ。と。も。全。く。治。せ。と。能。く。某。一。の。法。あり。ま。の。麻。肺。湯。を  
飲。し。ち。刀。を。り。て。脳。袋。を。破。開。き。風。延。を。取。出。し。て。病。根  
を。除。け。た。へ。全。く。痊。ふ。曹。操。勃。然。と。し。て。怒。り。て。曰。く。汝。を。去  
を。殺。さ。ん。為。す。華。陀。曰。く。主。上。ま。の。命。を。や。関。羽。曾。て。毒  
の。矢。に。中。し。と。れ。某。の。臂。を。き。り。開。き。骨。を。刮。て。藥。を。と  
あ。た。り。け。る。に。自。然。と。全。く。憂。う。今。主。上。の。命。ある。病。を  
あ。た。り。疑。ひ。し。ぞ。曹。操。曰。く。臂。の。病。へ。骨。を。刮。も。さ。も。わ。ら  
ん。ま。が。脳。袋。に。い。づ。る。臂。は。同。う。ら。ん。汝。を。去。ら。ず。関。羽。と。昔

相親む。まのとなり乗て。まを殺して。関羽が仇を報ぜん  
との計とある。とて。左右の兵をよび。急ぎ。拷問せよ。い  
ひけ。賈。詡。曰。く。浩。る。名。医。を。あ。り。て。殺。し。た  
中。を。曹。操。い。ふ。く。怒。り。此。の。と。き。鼠。輩。を。生。て。世。の。妨。に  
せ。ん。と。獄。に。下。し。て。拷。問。せ。し。む。獄。を。司。る。奉。行。は。吳  
氏。の。人。あり。人。号。して。吳。押。獄。と。よ。ま。す。の。人。毎。日。酒。食。を  
送。り。て。華。陀。を。持。成。け。る。に。華。陀。の。恩。を。感。じ。ま。す。の。ま  
非。命。の。死。を。受。根。ら。る。に。青。囊。の。書。を。ま。せ。世。に。傳。ら。ず。深  
く。御。辺。の。恩。を。感。じ。ま。す。今。肩。簡。を。封。じ。て。家。人。を。送。ら  
ん。御。辺。の。肩。簡。を。り。て。ま。が。家。を。行。青。囊。の。書。を。取。ま  
た。と。我。ら。も。ら。む。を。尽。く。傳。て。神。効。を。繼。ぐ。と。云。け。ま。す。

續通鑑綱目卷之九

吳押獄が曰く。青囊の妙術を得ば。この役を棄て  
ひろく天下の病人を救ひ。先生の徳を全せんとして。金城を行  
て。華陀が妻と尋ね。昏闇で渡して。青囊の昏を受いて  
ぎ。家も回りにて。藏しをたけるが。十日をうり。曹操が疾  
いよく重り。華陀を獄中へ殺されし。呉押獄の役  
を休て。家も回り。青囊の昏を以て。医をふさんといひ。け  
べ。妻怒りて。曰く。青囊の昏へ。まじり。焼棄し。呉  
押獄。いふ。人ぞと問。妻答て。た。青囊の昏を。学  
びて。華陀が。妙を得。た。獄中へ。落。て。責。殺。さ。し。  
ば。傳へ。て。せん。我。の。人。は。焼。棄。し。と。す。と。  
た。の。人。は。青。囊。の。昏。世。に。傳。へ。て。曹。操。に。華。陀。を。殺。し。て。す。

病いよく重り。吳蜀の亡びざるを憂る。吳より使來り  
て。昏闇を献り。は。乃ち披き。入る。その文。曰く  
臣孫権久知天命。以歸皇上。伏望早遣大將。剿滅劉  
備。掃平兩川。臣即率群下。納土歸降。  
曹操。了。て。あ。ざ。笑。ひ。孫。権。を。以。て。火。上。に。居。し。め。ん。と  
さ。と。の。群。臣。に。示。し。け。侍。中。陳。群。尚。書。桓。階。二  
人。地。に。伏。し。て。曰。く。漢。室。安。帝。より。以。來。國。祚。衰。  
へ。た。今日。の。主。上。の。功。徳。魏。々。と。して。生。靈。を  
お。め。ぎ。望。む。の。人。は。吳。の。孫。権。也。外。に。あり。て。臣。と。稱。さ。し。  
ま。れ。天。人。の。應。ち。り。主。上。を。尊。大。魏。皇。帝。の。位。に。即。て。正  
統。を。繼。ぐ。人。曹。操。笑。ひ。て。曰。く。漢。の。事。を。三。十。余。年。

たゞで功徳と立とゞくも。身今王位に在りぬ。王位を  
み足り。ちんぞ外に望むとわらふ。夏侯惇諫て曰く。天下はと  
ぐく。漢の運とやみ尽きて。世のあらたむ起る。とて志を今主  
上戎に即し。三十余年功業す。百姓を安らつて。天下を  
くんと服せ。古より万害を除去。民の服する所の。即ち生  
靈の主なり。天に應じ。人々順ひて。帝位に即し。曹操曰  
く。施於有政。是亦為政。いやくも。天命在孤。とす  
あいち為周文王の孫とす。天子にせむとす。意  
まろりと人々を知らりける。

曹丕報政称魏王

魏人帝位をすむまど。曹操辭して。從はるけし。司馬

懿曰く。今吳の孫權を臣と稱して。東顧も。主上は  
官を加く。玄德を伐し。ちり。曹操曰く。この理も。れは善  
として。孫權を。驃騎將軍南昌侯として。荆及びの牧を領  
せしむ。孫權を。恩を受て。恩を謝し。于禁を送て。都の  
と。このと。曹操が病なく。重り。その夜の夢。三匹の馬の  
槽と同じく。物で食とせけ。夜明て。賈翹問て曰。我  
昔。三匹の馬が。同槽にて。物で食。夢をえて。馬騰馬休  
馬鉄を疑ひて。その全家を殺せし。今夜又この夢と  
たり。賈翹答て。馬の夢へ。ま吉兆なり。主上あんで。ま  
を疑ひ。人々といひけ。曹操たれより。んを安んず。卒  
司馬氏の天子とす。人々を。知りける。うたてけれ。其夜



會大興合三國志五終卷之十九

梨樹の精霊  
曹操

曹操



躍音潭神

夢在酒醒

會大興合三國志五終卷之十九

三十五

三更の比志たり頭目沈迷しければ凡ふよひで坐さるるも  
ちまち殿中の色ありて帛を裂がててちりちりひもつて愕ひて  
せざるは伏皇后董貴妃二人の皇太子もらび董承亦二十  
余人遍身血を染て愁雲の中を立隠々として命を求る色  
しけし曹操剣を抜て虚空を砍みりのひく音して殿乃  
西南の角震ひ崩る。諸人きりり曹操を別殿に扶け坐し  
るが次の夜も男女あげき叫音曉に至るまで絶ざりけり  
曹操諸將をあひら。もと我馬の中にあると二十余年卒  
怪異の事やえざり。近比かくのときへ何ゆゆと問けり。諸  
人。道土の命とて蘇てきたり。襪をせんとして勧ける。曹  
操が曰く。獲罪於天無所禱と云り。孤天命をてん。及ば日

二千金を用ゆとも安んぞ救とを得んと。卒に襪を成し  
ゆ。次の日の気上焦々塞ゆ。目よりのとんろと克ざりければ  
復疾瘳とせしめて義を。怪き雲の中を伏皇后董貴  
妃の外董承亦二十余人隠々として生まれければ復侯瘳  
のめと叫ぐ。昏絶し。と云り。重病を受けて起とあはれ。も  
曹操もあち前將軍曹洪侍中陳群中太夫賈詡主簿  
司馬懿とせしめて曰く。もて天下を縦横するに三十余年。も  
ぐく逆賊を滅ぶ。呉の孫権蜀の玄德のいまも服せ  
ず。孤は病危し。もつたす。逃まがたまを志る。汝四人は後の  
大事を託す。長子曹昂は不幸ありて宛城に死す。今十  
氏四人の子を生む。常は三男曹植を愛む。のへども虚華

一とて実なり。次男曹彰ハ勇ましく計高く四男曹熊ハ多  
 病ましく保がず。たゞ長男曹丕ハ篤厚恭謹ましく才智と  
 り備えり。大事を任むるにたふさぐ人なり。汝ホよくまゝとて佐け  
 ちのく忠義の心を勵し。長久の計とて致せ。怠とあつれとて  
 長嘆一色涙下と雨のごとく。忽然としく息絶とり。壽六十六  
 歳とれた。建安二十五年春正月下旬あり。文武の百官色  
 ととあつて哀を哭き。いそぎ。櫬を送り。鄴郡にたのむまけを  
 曹丕にまかせ。文を哀とあげ自ら城外に出で。櫬をむく。孝を  
 うけて祭とま。哭く。色大震中庚子。司馬孚進出て曰。太  
 子。哀みと止め。人主上とて天下崩とて。天下震動と。詔官を  
 んぞ。嗣君を立て。万國を鎮め。いそぎ。詔人まお曰。太子す

らる。寶位を登り。之けとども。いま。天子の勅命より。何  
 ぞ。輕く。行む。と。兵部尚書陳矯とて。生て曰。主上  
 已薨。と。ひて。太子。今。傍あり。勅命の出ると待た。た  
 社稷危し。早く太子を冊で。王位に上せ奉る。誰か。從はざ  
 る。ん。と。剣を按て。怒け。詔人まお。と。怖と。曹丕と  
 扶て。位に即んと。と。許昌より。華歆馬と。飛しく。魏王と  
 来り。詔人まお。何ゆ。と。問。華歆馬と。曰。魏王と  
 ぞ。薨。と。天下震動と。汝ホ。君の。祿と。食。と。今。早。太子と。立。と。華  
 歆。曰。と。漢の。天子。奏。と。勅命と。取。と。詔。人。ま。お。曰。と。華。歆。曰。と。

と出く高らうまの事と読その制は曰く

魏太子丕昔皇天授乃顯考以翼我皇家遂護涂羣  
凶拓定九及弘功茂績光於宇宙朕用垂拱負宸二十  
有餘歲矣天不憖遺一老永保予一人早世潛神哀  
悼傷切丕奕世宣明宜秉文武紹熙前世今使使持  
節御史大夫華歆奉策詔授丕丞相印綬魏王丕綏  
領冀及牧方今外有遺虜遐夷未賓旗鼓猶在邊  
境予也不得輟又斯乃播揚洪烈立功垂名之秋也  
豈得修諒闇之禮况曾閔之志哉其敬服朕命抑弭  
憂懷勞祗厥緒時亮庶功以稱朕意嗚呼可不勉歟  
建安二十五年春二月初詔

そのこと華歆詔讀を以て魏の事へ威を著す。漢帝は迫  
り強てその詔を下せり。曹丕もて魏王を登り百官皆持  
賀して慶と述る。鄢陵侯曹彰も約ら十萬の勢力を  
率して長安より来り。告げし曹丕もて曰く  
弟の曹彰へも到りて深く武藝を通す。今大軍を率ひ  
来るへ必すも位をあらそふ為ある。とた一人を以て  
て曰く某も。人の心根を志す。福がくち一言を以て  
とて折れ人た。河東襄陵の人賈逵字は  
梁道とて乃ち諫議大夫なり。曹丕志うと喜びけ。賈  
逵城を出て門外にひく曹彰を問て曰く先君乃  
至綏へ何うある。賈逵色を正して曰く家も長子あり。國

諸君あり。先君の至愛は足下のまりの人とならざる。今何  
の如何なる人ぞ。曹彰黙然として言さず。進んで宮  
門を叩きけり。賈逵問て曰く。足下は来りぬ。父  
の喪を發せしむ。又は位を争はん為る忠孝の人とあらん  
とておのひめしう大逆の人とあらんと思ひぬ。曹彰曰  
く。来りて父の喪を發せしむ。異心と存せしむ。賈逵曰  
く。異心と存ししむ。おのひめしう大軍を従へしむ。おの  
ひめしう疑ひをたると多し。曹彰とあるは兵を尽く退  
けしむ一人内に入り。再拜して曹丕を見へしむ。色を  
あはれ哀れ哭き。手下の勢とてとくく曹丕と典けしむ。曹丕も  
あはれ再び鄢陵に回し。兵を分て守らしむ。されしむ。曹

丕魏王の位に登り。建安二十五年と延康元年とあら  
しむ。賈翽と大尉に封じ。華歆を相國とし。王朗を御史太  
夫と大小の官僚ととくく封賞を加ふ。曹操と高陵を  
葬り。謚して武祖と号しむ。

繪本通俗三國志五編卷之九終



